



写真上——佐賀瀬川源流の明神ヶ岳方面を望む
写真下——長尾原の古扇状地は今、肥沃な畑地になっている

複合扇状地

新鶴村は福島県の西北部、会津盆地の西部に位置し、東は北会津村、西は柳津町、南は会津高田町、北は会津坂下町に隣接している。総面積は四〇・五四平方キロメートルで南北に長く、地勢は海拔八六九・三メートルの高尾嶺を最高とし、最低二〇〇メートルまで、西方から東方へ向かって緩傾斜している。

地形は特徴的に大きく三つに区分できる。高尾嶺をはじめ明神ヶ岳の連嶺を最奥に低山が続く「西部山地」、平野北部の大半を占める「佐賀瀬川扇状地」、そして阿賀川(大川)の一部と宮川(鶴沼川)によつてもたらされたと思われる「東部氾濫原」である。そして新鶴村の歴史を振り返る時、もつとも特色を表わすの

が「佐賀瀬川扇状地」なのだ。

新鶴村名誉村民山口弥一郎氏が昭和三四年(二九五九)に著わした『奥州会津新鶴村誌』(以下、『村誌』と記述)にも、「新鶴村の大半は実はこの西部山麓の佐賀瀬川扇状地の上にあるといつても過言ではない」「この古扇状地面が新鶴村では最も早く人間の居住地となり、縄文時代から、弥生式、古墳時代を経て現代まで、断続はあつても、人間居住の好適地に選ばれ、新鶴村文化はもちろん、会津文化の一つの源泉地をなしたものとみられる」(原文のママ、以下も引用は同)といった表現で、この扇状地の重要性を説いている。

会津盆地は盆地底周縁の断層崖下に並ぶ扇状地形と、雄国火山麓地形から成るが、中でも佐賀瀬川扇状地は標式的なものともいわれる。ただし一口に扇状地と称しているものの、

前述の引用文にも「古扇状地」とあるように、沖中田・阿久津・新屋敷・沢田の西、矢ノ目、水島辺を末端とする現在の扇状地と、佐賀瀬川部落から長尾原、根岸山に続く一帯のシラス層の台地を形成する古扇状地の複合扇状地である。

そして、これらに共通するものは何か。いうまでもないことだが、氾濫原をもたらしした「佐賀瀬川」ということになる。

静寂の大谷地溜池

かつて佐賀瀬川は「逆瀬川」と書いていたという。字義通り、急流奔放して瀬が逆立つほどの暴れ川であつたらしい。そもそも氾濫原とは、河川周辺で洪水の際に氾濫する所をいい、それによりさまざまなダメージも受けるが、新しい土壌や栄養物質の供給も受ける所で、いわゆる肥沃な扇状地を形成するに至る。佐賀瀬川の古扇状地は洪積世末期(約二万年前)の氾濫原であつたらしい。

この、新鶴村のあらゆる文化、生活の発祥地であつたといわれる佐賀瀬川扇状地を知るには、流域を辿る以外にはない。——「佐賀瀬川紀行」は、このような考えで始まつた。縄文・弥生・古墳時代を経て、仏教文化導入あたりまでの痕跡を見聞する試みである。

ここで私たちは、会津史学会会員で新鶴村文化財保護審議委員でもある、郷土史家の唐澤正義さんという最適任の案内人を紹介いただいた。何しろ唐澤さんといえば、父親の倉次さんがそもそも『村誌』の編纂委員の一人であり、同じく委員だった村松寅吉さんは妹のご主人の父親にあたるという、まさに歴史と